

## 第16章 東欧のユダヤ政党

チエコスロヴァキア——帝国の二・四パーセント

第一次世界大戦後の三大帝国没落によって、英仏両帝国主義支配下の東欧では新しい権力配置が現出していた。ドイツとソ連の孤立化が英仏の二大目標となり、ドイツの動きを断固封じ込めることで連合国はリトアニア・ポーランド・チェコを勧奨して民族ドイツ人（ドイツ国籍をもたない在外ドイツ民族）の土地を分断させた。ドイツの同盟国であったハンガリー・ブルガリアもかなりの領土喪失を被った。その結果さまざまに民族的分断に苦しむ一群の国家が出現することになった。こうした地域住民の憎悪の増幅の中で反セム主義が出てくることは避けがたかった。

シオニズム運動は、東欧各地域のユダヤ教徒共同体において議会に代表を送るのに十分な勢力を生み出すことに成功した。こうした代表を送れたのはラトヴィア・リトアニア・ポーランド・チエコスロヴァキア・ルーマニア・オーストリアであったが、ユダヤ人人口が七万人以下のユーゴスラヴィアでさえ、たとえばザグレブにおいては市議会選挙に独自のユダヤ人候補を立てようと努めたのであった。しかしながら、シオニズムはその地域の民族集団の中でも最弱の分離主義イデオロギーだったので、危機的な東欧民

族主義とけっして協力することができなかった。

一九三〇年代にはチエコスロヴァキアは東欧に一般的であった独裁体制の狭間はざまにある民主主義のオアシスとして評判がよかったが、むしろたかだかハプスブルク帝国のチエコ版にすぎないというのが実情であった。チエコ人のブルジョアジーがスロヴァキア人を支配し、容赦なく周辺のドイツ人・ポーランド人・ウクライナ人領域をミニ帝国に編入したからである。チエコのリーダーはまた無比の反セム主義者であった。ユダヤ人はドイツ文化、マジャール文化の代理人とみなされており、チエコ共和国の初期には反セム主義者の騒乱がみられた。<sup>1)</sup>共和国軍は、第一次世界大戦中にハプスブルク軍から脱走してロシア軍に転じ、ロシアからの帰途には白衛軍側についてボルシェヴィキと闘った元チエコ軍団の出身者に支配されており、將軍たちが反セム主義者なのは明々白々であった。ユダヤ人が人口の一五パーセントをなしていたカルパト・ウクライナ人のハシディズム信奉青年は軍將校団の連中の機嫌が悪いとつねに標的にされ、スロヴァキア出身のユダヤ人はマジャール化を進める勢力とみなされていた。ユダヤ人が高級將校になることなど考えられなかった。チエコ軍内ではチエコ人と、チエコ人支配を受け入れたスロヴァキア人以外は誰も権利を認められなかった。<sup>2)</sup>

チエコ人ブルジョワジーは、ユダヤ人がドイツ人あるいはマジャール人と交わることを望まなかったが、チエコ社会民主党だけはユダヤ人がチエコ社会に入るのを助けた。<sup>3)</sup>ブルジョワのきまり文句は「ナシヨナルなユダヤ人」の後援であったが、民族統計上はユダヤ人がユダヤ人と申告するのを認めていた。一九三〇年にユダヤ人は三五万六八二〇名がチエコ内で生活しており、全人口の二・四パーセントを占めていたが、ユダヤ人と申告したのは五八パーセント、チエコ人と申告したのは二四・五パーセント、ドイツ人と申告したのは一二・八パーセント、マジャール人と申告したのは四・七パーセントであった。

チェコスロヴァキアのシオニストは地方政治でも「ズイドヴスカ・ストウラーナ」というユダヤ人政党を通じて活動していた。一九一九年以降ブラハや他の都市の市議会にも代表を送っていたが、ユダヤ人の公認候補を国会には送れなかったのが常であった。一九二〇年の国会選挙でユダヤ人政党の統一候補に投票したのは、七万九七一四名だけであった。一九二五年には九万八八四五票が投ぜられた。一九二八年には最も熱心なユダヤ人党単独候補論者でさえ非ユダヤ人党と同盟しなければ国会に代表を送れないと覚り、チェシン地域の間層政党および社会民主党に適当な同盟相手を見出したのであった。一九二九年の国会選挙では共闘の成果によって一〇万四五三九票獲得し、二名のシオニスト、二名のポーランド人議員を下院に送ることができた。しかしこの同盟はまさに選挙のためだけのものであった。シオニストはチェコ政府に忠実で、チェシンのポーランド人はやはりポーランドのほうを志向していた。国会でシオニストはまた別の問題に直面することになった。議席数に比例して代表質問権も与えられることになっていたのである。したがって二人のシオニスト議員は「客員」としてチェコ社会民主党議員団に頼ることを余儀なくされた。社会民主党はよきチェコ人としてすでにユダヤ人を党内に迎え入れており、今回二人のシオニストを迎えたのも与党として政府を支持する議員票をこれで二つ増やせると単純計算したからであった。ユダヤ人のきわめて狭い利害関心、日曜閉店法への反対、カルパト・ウクライナ人のヘブライ語学校への政府による補助金拠出を求める努力等によってもチェコ人の国家支配が阻害されることはなかった。シオニストは自らの野望達成のためにチェコ人勢力を支持しており、けっして自らを従属民族集団の同盟者とはみなしていなかった。選挙同盟を結んだポーランド人とさえ組むつもりはなかったのであった。そのユダヤ民族主義にもかかわらず、まさにチェコ人優位の添え物となってしまう。言語同化主義に反対する闘いにおいて、シオニストは他の少数民族の権利獲得の闘争もラディカルな同化主義とみなしていた。第一目

標は駆け出しの学校制度を中央政府に支持させることであり、これを達成するためにチェコスロヴァキア国家、トーマス・マサリク、エドヴァルド・ベネシュに忠実であり続けたのであった。

一九三八年のズデーテン問題をめぐる降伏、またそれに相伴ったベネシュ政権の倒壊の後では、残部チエコ国家による「ナショナルなユダヤ人」の後援は雲散霧消した。チエコの新しい指導者たち、実際には前政権の右派が、ナチスによる中央ヨーロッパ支配という新しい現実に断固適応するつもりでいた。万が一ユダヤ人がこの新「チェコスロヴァキア」を勝手に動かすようなことにでもなれば、ヒトラーが自分たちを相手にしてくれるはずがないということを弁えていた。ベネシュ共和国下の内閣で支配政党であった農民党の指導者、新首相のルドルフ・ベランは、ミュンヘン会談の後チェコ国会に対して、反セム主義が今や政府の公式の政策であることを宣言した。「国家理念の担い手たる諸国民の生活においてユダヤ人の任務を制限する」ことが必要になったとしたのである。ベランの宣言は一票の反対に遭遇した。ユダヤ人を擁護しようと立ち上がったのはチエコのひとりの右翼政治家であった。しかしベネシュ体制下で被抑圧者の利益のために弁じなかつたユダヤ人議員は、今回も自民族擁護の声を上げることができなかつた。<sup>(4)</sup>

ルーマニア——「ユダヤ人はパレステイナへ行け！」

一九一四年以前のルーマニアは反セム主義が決定的に強かった。ユダヤ人のほとんどはロシア出身の難民であったが、ルーマニア政府はこの人びとにも、またその後裔にも市民権をただもう与えようとしなかつた。第一次世界大戦中、連合国側に立って戦ったことにより、ルーマニアには大戦後のパリ講和会議で新しい領土があてがわれたが、その分また何千というユダヤ人をルーマニアはかかえこむことになったの

であつた。講和会議の西欧列強は、ブカレスト政府が新たにルーマニア領に包摂された数百万の人びとに對して最低限の権利を認めるよう主張した。これによつて、今やユダヤ人も市民権を享受することになつた。ユダヤ人に対する差別はもろろん続き、他の非ルーマニア少数民族に對しても新たな差別が生じたが、民族的敵意はルーマニアの無数の問題の一つにすぎなかつた。根本的な經濟問題は措いても、政府自身飛び抜けて腐敗していた。「ルーマニアは国家ではなく、情実がおつてしまふ馴れ合い集團に等しい」というのが当時のイディッシュ語の有名な諺になつた。

一九二〇年代、一九三〇年代初期を通じてユダヤ人の地位には若干の改善が見られた。ルーマニアの人口の五・四六パーセントを占めていたユダヤ人の票を政治家も得ようとつとめはじめた。国王カロール二世の愛人はユダヤ人女性で、あの有名なマグダ・ルベスクであつた。あらゆる進歩的分子は、反セム主義をルーマニアが克服しなければならぬ後進性一般の統一的要素とみなしていた。社会民主党はきわめて臆病であつたが、民族農民党(NPP)および急進農民党は、反セム主義に反對する態度という点では、より迫力があつた。これら農民党は、土地改革と民主化を求めていたし、またユダヤ人の諸権利を否定する者が同時に民主主義一般の反對者である点についてもよく認識していた。

極端な反セム主義の党を除けば、どの政党にもユダヤ人の支持者がいた。ゆたかなルーマニア系ユダヤ人は、反セム主義政党でも穩健であれば、また暴力団まがいの反セム主義者に警察をさし向ける態度をとれば支持した。トランシルヴァニアのユダヤ人の場合は熱烈なハンガリー民族主義者になつた。社会民主党に投票したり非合法の共產党を支持するといった左翼シンパのユダヤ人は少なかつた。ルーマニア系以外のユダヤ人に依拠していたシオニストは、漸次ユダヤ人政党をつくりあげ、地方選挙を何度か経験した後の一九三一年には国会選挙にも打つて出た。シオニストはそれなりに善戦し、六万四一七五票(ユダヤ

票の五〇パーセント以上、四議席)を獲得した。もつとも、これは全体の二・一九パーセントの得票率でしかなかつた。一九三二年七月の選挙ではわずかに前回を上回り、六万七五八二票(二・四八パーセント)を獲得し、議席四を維持した。

ユダヤ人政党のリーダーは、小都市のミドル・クラス出身者が多かつた。反セム主義に反對という民族農民党の立場を評価していたから、国会でも農民党とゆるやかながら連携行動をとつていたが、せいぜいが微温的な支持であつた。ユダヤ人党の基盤をなしていたミドル・クラスは運動の協働パートナーからの經濟的脅威にさらされていた。農民党は農民層の意識のすぐあとについていた。シオニストの指導者たちは、兩大戦間期のルーマニアが直面していた真の政治的難題に敢然と立ち向かうかわりに、もっぱらユダヤ人社会の間での活動に明け暮れており、民主化をかちとる闘争からは依然孤立したままであることによつてユダヤ人の立場を弱めつつあつたことを十分理解していなかつた。

一九二〇年代に極端な反セム主義者たちの活動はすでに暴力的になつていた。アルハンゲル・ミハエル〔を崇拜する〕軍団とそのテロリスト部隊鉄衛団の創設者であつたコルネリウ・コドレアヌは一九二四年のヤーシーの警察部長殺害事件では無罪放免されてゐた。一九二六年、ひとりのユダヤ人学生が殺害されたものの、一九三三年にヒトラーの勝利がインパクトを与えるようになるまでは極右が政權を握るチャンスはなかつた。反セム主義から緩慢ながら離れつつあつた傾向は、ナチの勝利とともにいっぺんに逆戻りする事になつた。今やファシストは多くの点で心理的にも有利な地歩を占めるようになったのである。高度に文明化された国のドイツが反セム主義に転じたのだから、ルーマニアの片田舎の極右についても遅れた狂信者と片づけてしまふわけにはいかなかつたし、鉄衛団もあらゆる腐敗に不可欠の構成要素と

だけいつてすませられなくなったのであった。

議会制デモクラシーの浸食はかなり急速に進行していったが、それに対する抵抗の動きもけつして少なくなかった。一九三七年選挙までは民族農民党も反セム主義にはつきり反対していたのであった。しかしこの年の選挙で党は態度を変え、反セム主義政党と選挙協定を結ぶに至った。急進農民党は反セム主義に依然反対し続けたばかりでなく、場合によってはユダヤ人の身の安全を断固直接護りさえしたが、もはや極右に対抗できる存在ではなくなっていた。

「自分たちで独自の候補者をたて……自分たちの間で選挙すればよい」

すでに一九三三年一二月の国会選挙でユダヤ人政党は嵐に見舞われることになった。ベルリンのヒトラーの勝利はブカレストでのコドレアヌの選挙勝利をいっそう確実なものにしたし、政党支持者の多くが、ルーマニアで今後安全に生きていこうと思うなら、ルーマニアの同盟国の保護を受けねばならなくなると覚ったのであった。ユダヤ人党は三万八五六五票（得票率一・三パーセント）と前回より票を落とし、議席も四議席すべてを失った。一九三五年、社会民主党は自由主義政党全部に人民戦線形成の呼びかけをおこなったが、共産党はそこから排除されていた。ひるがえって共産党のほうは、社民党および民族農民党との同盟を支持した。社共両陣営とも他でもなく民族農民党と肩を組むことを欲したが、民族農民党のほうはどちらの党とも同盟することを拒否し、一九三七年一二月の選挙にそなえてファシストとの「不可侵条約」に調印したのであった。社民党、急進農民党、ユダヤ人党は各党個別に候補を立て、共産党は反ファシスト政権に民族農民党が絶対不可欠であるという見地から、党支持者には民族農民党に投票するように呼びかけた。選挙は反ファシスト陣営の断裂破砕状態に道を開くことになった。社民党はすでに三・二五

パーセントと無力な状態になっていたのがさらに一・三パーセントにまで得票率を下げ、議会集団としては一掃された。ユダヤ人党も民族農民党には票を入れられなくなったユダヤ人の票をあてにして議会復帰を目指したが、得票はあまりに少なく、一・四パーセントの得票率しかあげられなかった。

社民党とユダヤ人党が仮に合同で選挙を闘っていれば、一議席に必要な法定の二パーセントはクリアできたであろうということにもなるが、それはそれでもちろんこうした統一戦線の動きは他の勢力の統一化をも同様にひきおこすことになったであろう。ユダヤ人が単独で選挙を闘うことは政治的自殺に等しかった。それはまさに反セム主義者が望んだ状況であった。この選挙の後首相になったオクタヴィアン・ゴガは選挙運動中、ユダヤ人には「投票に行かず家にいるように。さもなければ独自の候補者をたて、自分たちの間で投票を」と呼びかけていた。

「出国交渉は準備OK」

ルーマニアではシオニズム運動のどんな分派も反セム主義に抗する闘争に関心を示さなかった。一九三六年一月、アメリカの『労働シオニスト・ニュースレター（通信）』（当時アメリカに派遣されたポアレ・ツイオン代表エンツォ・セレーニとゴルダ・マイヤソン（メイヤ）のイデオロギー指導を掲載）は、ルーマニア情勢に関して、世界シオニスト機構における支配的傾向の戦略的立場を次のように述べていた。「農民党が即権力を握らなければ、ルーマニア国家はナチスがかわって指揮することになり、ドイツの衛星国になろう。出国交渉は準備OKである」。ここからも、現体制とあるいはその後継者（民族農民党であれファシストであれ）との協定が構想されていたことになる。もちろん、ある一定部分のユダヤ人の対パレステイナ出国を促進するためのものであり、「あまりに多いユダヤ人」の現存の「圧力」を幾分でも解

消する方法であった。しかし、もし反セム主義者がより苛酷な措置をとろうと動けば、さらに多くのユダヤ人を排除できるという意味において、こうした「交渉」も反セム主義者のイニシアティブでとりおこなえたであろう。また他国の反セム主義者の要求がさらに誘い水になってユダヤ人が「自発的」にヨーロッパから出ていく状態を作り出したであろう。台頭しつつあったファシズムに抗する闘争を組織するのに力を貸さなかった世界シオニスト機構は、ハーヴァラ戦略の東欧への拡大を目論んでいたのであった。

「ジダンニー・イン・パレスティナ（ユダヤ人はパレスティナへ行け）！」はとうの昔に鉄衛団や他の反セム主義者のスローガンになっていた。ユダヤ人にとって脅威に対する唯一わかりやすい対処の仕方は、自由を共同で護る意志のあるすべての人びとと統一して闘うことだったはずである。しかしシオニストは、右翼の急上昇が始まった時に選挙でユダヤ人多数の支持を得ながら、けっしてそのような方向で闘おうとはしなかった。ファシズムが実際に権力を握り、ルーマニアはホロコーストの恐怖をまのあたりにするところになったのである。

一九四一年一月、鉄衛団が政府内の同盟者と袂を分かち、短期ながら激しい内戦がブカレストにおいて展開された。鉄衛団はこの機を利用し、最も野蛮な方法で少なくとも二千名のユダヤ人を殺害した。犠牲者のうち約二百名は屠殺場に連れ込まれ、ユダヤ教で動物を屠る儀式を真似た殺人者たちの手で喉をかき切られて殺された。しかしこのときの顛末には今日なお知られていない別の側面もあった。ブカレスト近郊の小村ドウデステイ・チオブレアの酪農農民たちは、ユダヤ人地区に使者を送り、「私たちの村に来ればあなたがたの身はすべて安全です」と伝えた。千人を超えるユダヤ人たちがその村に逃れ、農民たちは猟銃で武装してユダヤ人たちを護った。鉄衛団が侵入をこころみだが、撃退された。<sup>(8)</sup>ドウデステイ・チオブレアのような村がもつと存在しなかったのは、ユダヤ人党も含めて、反ファシズム勢力が一九三〇年代に

コドレアヌのような殺人者たちに抗する闘争を統一化しえなかったためである。

叢書・ユニベルシタス 705

# ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著

芝 健介 訳

